

世論形成過程における沈黙の螺旋理論のモデル化

吉田暁生[†]

目的

インターネットの匿名掲示板、ブログなどの普及によって、我々は様々な人びとの意見を広範囲に知ることができるようになった。このような社会状況の変化が、世論形成過程に何をもたらすのかをさぐる。

先行研究

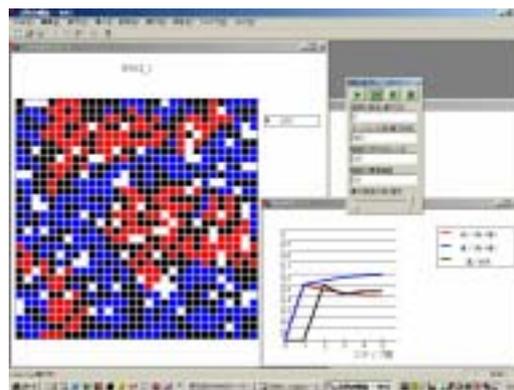
1973 年に出された Noelle-Neumann の仮説によれば、人間は社会的孤立を恐れ、自分の意見が多数派であれば自信を持って公然と表明するが、少数派であれば表明に消極的になる。この結果、多数派と認知された意見が実際よりも社会のなかで顕在化し、一方少数派と認知された意見は存在感を失い、社会的沈黙への螺旋を下る^[1]。

この沈黙の螺旋について、石井（1987）は、個人が社会全体の意見分布を完全に認識できると仮定し、多数派と少数派の比率を操作して、均衡値を探る数値シミュレーションをおこなった^[2]。また、石黒ら（2000）は、閾値を一樣とするものの、隣接他者と全体の正確な意見分布の情報をもとに自分の意見を変えるモデルをつくり、やはり初期の勢力分布を操作した^[3]。本研究では KK-MAS を用いることによって、さらに現代社会の実態に迫る。

モデル

二次元空間に、ある意見に賛成のエージェント（赤）と反対のエージェント（青）をランダムに配置する。それぞれに意見の表明をするか否かを決定する閾値を正規分布にしたがって振り当てる。1 ステップで

各エージェントは周囲を観察し、自分と同じ意見の割合が自分の閾値を下回った場合、意見の表明を差し控える（黒になる）。



結果 予想してみてください！

視野(周辺観察の範囲)の広さによって、カタストロフィーが生じたり、均衡したりする。また、意見の再表明(黒の復活)を認めるかどうかによっても結果が異なる。

参考文献

- [1] Noelle-Neumann, E. (1984) *The spiral of silence* (池田謙一・安野智子訳, 1997, 「沈黙の螺旋理論 世論形成過程の社会心理学 改訂版」, プレーン出版)
- [2] 石井健一 (1987) 「世論過程の閾値モデル 沈黙の螺旋状過程のフォーマライゼーション」, 理論と方法, vol.2 No.1, pp.15-28
- [3] 石黒格・安野智子・柴内康文 (2000) 「Dynamic Social Impact Theory シミュレーションへの全体情報の導入: マスコミュニケーションの『強効効果』は社会を統合するか?」, 社会心理学研究, vol.16 No.2, pp.114-123

[†]東京大学情報学環・学際情報学府 社会情報学コース 修士1年